

## 中学時代

中 42 回卒 原 洋<sup>(※1)</sup>

私の在学した相馬中学の五年間は、太平洋戦争の末期で、軍需工場への動員はなかったものの、一言で言えば戦時色一色にぬりつぶされた暗い谷間の時期であったと言えよう。

軍事色は生徒の服装に最もよく表れ、制服はすべてカーキ色、ゲートルをはいて登校し、先生や上級生に遭えば七歩手前で立止り挙手の礼。軍事教練は最も重要な科目とされた。西山の野外演習場から、重い三八式歩兵銃を担ぎ「アツツ島玉砕の歌」などを歌いながらよく引上げて来た情景を思いだす。年に一回、査察があって、会津若松の連隊から大佐だかの偉い将校が来て、全校生徒長友のグラウンドに整列、分列行進をやっておめにかける。教師も背広にゲートルをつけ、戦闘帽などを被って付添われた。若い教師は張切っていたが、老教師はむしろ痛々しい感じであった。

日常生活の規律も次第に厳しく、朝礼の時、よく突然の服装検査があり、ズボンのポケットを縫っていない生徒がなぐられた（ズボンのポケットは手を入れるからぬいつけておくこととされていた）。一校時始業前には便所に入ってはならず、二校時と三校時の間は水を飲んでではならなかった。規律が際限もなく細かになると生徒は覚えきれなかった。

規律厳守の陣頭指揮に立たれたのは、鬼の教頭、斎藤馨先生で、先生ににらまれると生徒は皆蛇の前の蛙のようにすくんでしまった。先生は東大出の生物の先生で、先生のやまりの交尾の話は面白かったが、教科書など忘れると「職員室の入口に立って居れ！」の一言で立たされた。私も一度経験があり、授業が終って先生方が次々に帰ってくると、ある先生はニヤニヤ笑い、ある先生は「どうした」と声をかけ、ある先生はコンコンと諭される。しまいには涙が意志に反して出てくるのであった。

…… 中略 ……

戦時の物資不足で生徒の服装も年々ひどくなり、ランドセル（「背囊」などよばせられた）も皮からズック、人絹（スフ）と変っていったように、先生不足のためか教師の質も次第に低下してゆくようだった。下読みしてきた箇所が三〇分ぐらいで終わってしまうと、「自習！」といって絶対前に進まない英語の先生もいた。「先生、そこは分詞構文でないですか」などど生徒に聞かれ、「分詞構文って何？」などどかえって質問する先生には驚いた。

戦争の逼迫した状況の中学生にとってはまだ現実ではなかったのだろう。太平洋戦争が始った昭和十六年十二月八日は小雪のちらつく寒い日であったが、あの真珠湾攻撃を私達は教室で始めて知らされた。三年甲組の教室に現われた山崎功先生は、突然、「日本もとうとうやったぞ、モウ」とどなられた。山形県出身の先生はひどいズウ弁の上、語尾に「モウ」という一種の方言をつけるくせがあったので、生徒は「モウさん」の愛称でよんでいた。それが興奮のあまりとめどもなく「モウ」を乱発されたので、クラスの一人が思わず吹出した。先生はカンカンにおこって「何がオカスイ！」と、コーンと座席表でなぐられた。先生の幾何の授業は熱が入ると、定規などつかわずに円や三角形をかかれたから円は大抵楕円となり直線はすべて曲線となり円に接する直線はいつも接していなかった。今、岩手大におられる先生、ご健在でしょうか。

…… 後略 ……

(※1) 昭和19 (1944) 年卒 中村出身